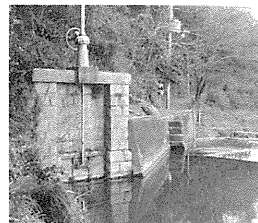




『花田町』をたずねて

花田町は、明治22年(1889)に高木、小川、上原田、加納原田、勅旨、一本松の6村が合併して飾東郡花田村となり、明治29年飾磨郡に所属。昭和32年に花田町として姫路市に合併した。「花田」の名は、この地域のほとんどの耕地を養ってきた用水である花田井からつけられたという。『播磨国風土記』には、この地域を含む相当広い範囲を指して「^{とどろきへのま}私里」といったが、のち「少川里」と改めたとある。今の小川には、弥生式土器が出土したり、石積山古墳群・小川廃寺跡があり、「少川里」の中心的な位置にあったと考えられる。

古く市川の流は砥堀の南で分岐し、西の流れを大川(船場川)といい、東の流れを小川といていた。小川の流れは河道変遷を繰り返したが、池田輝政築城の際の堤防改修により流路が固定され、次第に本流の市川としての役割を果たすようになってきた。この地域の人々の生活と市川との関係は深く、農業だけでなく、江戸時代後期には姫路晒を生産し、今も皮革業は盛んで姫路革の名をもって広く知られている。また、最近まで製瓦業も盛んであった。



◀花田井口

▼巡礼道

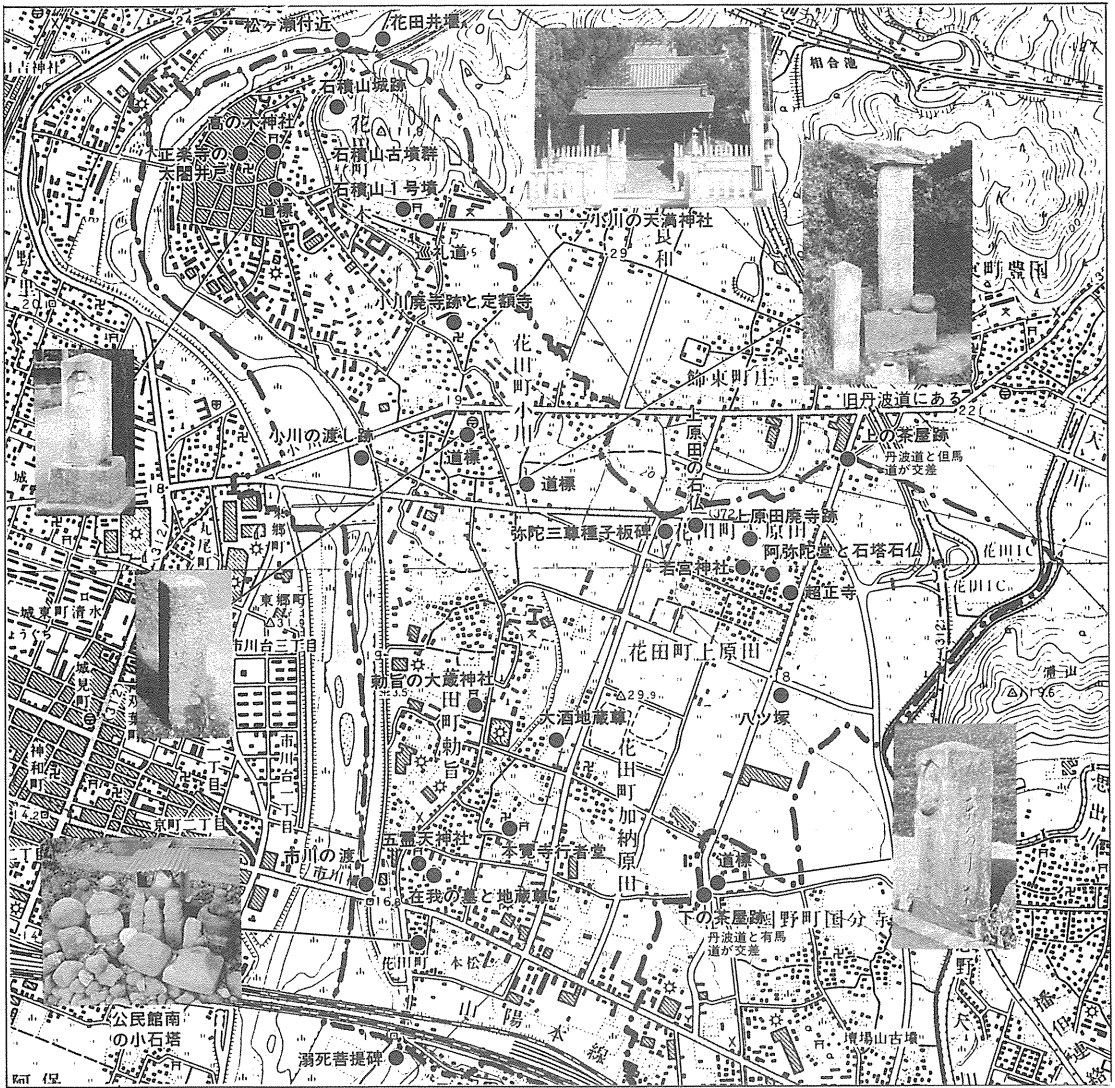
小川天満神社付近

◀花田井堰
少し下(左)が
「松ヶ瀬」あたり

花田井 花田湯ともいう。高木・小川・勅旨・上原田・加納原田・豊国・深志野・国分寺・御着などの耕地を養ってきた用水である。現在使用している花田井口の下(松之元)の旧樋門跡は、正徳3年(1713)の花田井掛り絵図に描かれている樋門と同じで、最初創設された井口であるといわれる。その後幾度か修理や移築をしたが、天保元年(1830)井堰を上流に移し、井口も保城山麓に新設し、百五十余間の隧道を掘って従来の井溝に送水するようにした。井堰は昭和28年の改修工事でコンクリートブロックとなった。加納原田は古来から花田井の井元といわれ、同井を管理する井守役が置かれている。加納原田には花田井に関する言い伝えや記録もあり、同井の創設と深い関係がある。明治20年から同33年の13年間にわたる花田井の水論は有名である。

松ヶ瀬の渡しと巡礼道 松ヶ瀬の渡しは、高木の北、花田井旧樋門跡付近の松之元あたりを指すが、場所は明確でない。「姫路附近之古地図」に、松ヶ瀬を渡る道を上古往還とし、古くは山陽道、巡礼道の通過地点であった。松ヶ瀬の渡しは幕末にも巡礼が利用した日記がある。巡礼道は、豊国で丹波道と分かれ小川天満神社前を通って高木に入り、松ヶ瀬を渡り白国、書写に至る道という。

石積山城跡 高木の東、前山頂上は「城田のテッペン」とよばれ、大正3年に埋蔵物を発見したといわれている。『^{おんりょうけん}蔭涼軒日録』には、文明18年(1486)から長享2年(1488)に「石積城」の記事が集中しており、赤松政則が父の33回忌を営んでいる。『飾磨郡誌』の「高木構居」と同一と考えられる。



高の木神社 高木には、聖神社・大將軍神社・天満神社があつて高木3社と呼んでいたが、大正13年(1924)の地区改正で聖神社は大將軍神社西傍に遷座され、この2社も昭和39年天満神社と合祀して、高の木神社となった。聖神社は、高木たかぎの祖聖翁を祀り、高木の氏宮であつた。

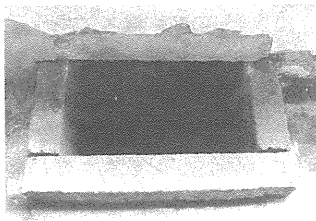
太閤井戸 高木の正樂寺境内にある。羽柴秀吉が播磨を平定して、この地に一泊した時、宿の老婆が出してくれた皮の敷物が精良なるを賞し、その礼に望みのものを与えようといった時、老婆は井戸がないのでそれを所望したという。今、寺の北の土堀の下にその半身を現している。

小川の天満神社 杉板に菅原道真の像を彫つて神体として祀つていたので、杉板天神ともいう。もと字高岸にあつて、興国元年(1340)の勸進と伝えられ、正保4年(1647)今の地に遷座。元禄14年(1701)の銘がある手水鉢はもと御宝前の鳥居であつた。弘化4年(1847)の御神燈と狛犬、宝永7年(1710)の手水鉢、明治40年の相撲番付けや相撲取りの絵馬、小川渡船の櫓がある。

また、境内とその周辺は石積山古墳群の中心に位置している。



高の木神社



太閤井戸

石積山古墳群 小川の天満神社を中心として石積及び薬師縁山麓一帯(現花田中学校)に多数分布していた古墳時代後期の古墳群。開発で大部分が消滅してしまいましたが、神社の西の畑の中に石積山1号墳の横穴式石室が露出している。神社の境内にも古墳に使用したとみられる石が多く認められる。

小川の渡し跡と小川橋 小川の渡しは国道312号の小川橋の少し下手にあった。天正の頃まで市川の渡しとされていたと考えられる。江戸時代には冬季に仮橋が架けられ年貢橋と称せられた。明治3年8月渡船転覆事件が起こり溺死者16人ほどが出た。大正4年に小川橋が架けられ渡船は廃止。平成3年すぐ南に新小川橋が開通した。

小川廃寺跡と定額寺 小川の定額寺の東一帯で出土した^{あふみ}釜瓦から奈良時代に建立された寺があったと推定し、小川廃寺跡と名づけられた。遺構などは不明。

定額寺は小川廃寺跡の寺域を踏襲した寺院であろう。花田史誌によると、当寺の草創は奈良時代で、私寺として建立され、のち定額官寺の一つに列せられたという。幾度か災厄にも遭い、復興の都度宗旨も変えたという。寺号を金剛山定額寺と改めたのは元和3年(1617)のことで、この時は臨済宗。宝永5年(1708)黄蘗宗に改宗。今、境内に石積山古墳より出土した石棺材があり、それに刻まれた石仏は室町時代のものと思われる。

上原田の石仏 木村病院と用水路の間に建てられている。凝灰岩製で像の頭部は欠けているが、側面に永正11年(1514)の銘がある。上原田村明細帳に、「字仁王田156番(現地より70m西)に観音石仏壱体 高さ3尺7寸」とあるが、工事のため昭和58年、現在地に移転された。

弥陀三尊種子板碑 上原田の石仏の西方にある。昭和60年、天川河川敷から発見。高さ1.5m、砂岩製。主尊種子阿弥陀如来のキリーク、脇侍種子勢至菩薩のサク、観世音菩薩のサを刻んでいる。彫り沈めた月輪(周辺の線)はきわめて珍しい手法なので資料的価値が高く評価されている。南北朝時代のものではないかといわれている。

上原田廃寺跡 上原田字仁王田一帯で出土した古瓦から奈良時代末期に建立された寺があったと推定し、上原田廃寺跡と名づけられたが、遺構は認められない。超正寺記録によれば、聖徳太子の命により高麗の僧惠慈(便か)が開いた佛陀山乗福寺があったが、天平のころ堂塔伽藍悉く炎上したとある。

付近には、乗福寺ゆかりのお堂や言い伝えが多く残っており、阿弥陀堂横に集めて安置してあるたくさんの石塔や石仏もほとんどが当寺跡にあったものといわれている。

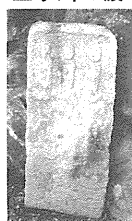
応星山超正寺の鐘楼 超正寺は文亀元年(1501)、天台宗佛陀山乗福寺の廃寺跡東南の地に一字を建立したのが始まりといわれ、浄土真宗の寺院。鐘楼は明治9年頃、総社にあった古楼を譲り受け移築したもので、梁上に^{けんかたぎ}劔酸漿の紋章が彫られているのは姫路城主酒井侯が総社に寄進したものである。



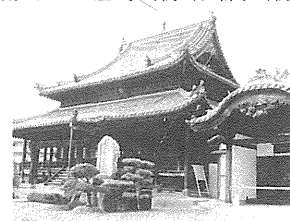
▲石積山1号墳



▲小川の渡し跡あたり 左 小川橋 右 新小川橋



▲石棺仏



▲定額寺

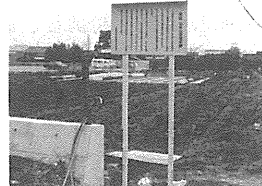
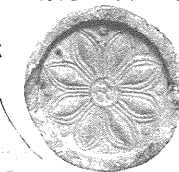


▲上原田の石仏



▲弥陀三尊種子板碑

上原田廃寺跡
出土の古瓦▶



◀上原田廃寺跡



▲石塔石仏
(阿弥陀堂横)

超正寺の鐘楼▶



若宮神社 奈良時代に草創された乗福寺の鎮守若宮大権現の遺祠と伝えられる。祭神は大年神。鳥居には「安政三丙辰歳二月初午 御草履取 御駕籠 御先手廻り 御跡手廻り」などの文字と氏名が刻まれ、明治初年に姫路藩のある藩士からもらい受けたものという。

ハツ塚 上原田字ハツ塚にある。享禄3年(1530)庄山城落城の際、討ち死にした小寺政隆の家臣8人を葬った塚でないかといわれる。今は1基のみ残っている。

本覺寺行者堂 堂内に先達法印長太夫の木牌がある。長太夫は寛延(1748~1751)の頃、村の疲弊を代官金沢清右衛門に訴え出て村勢の回復に功績のあった人といわれる。

大酒地蔵尊 加納原田字大酒に祀られている地蔵石仏。石像台石に「享保五(1720)庚子年十一月二十四日 願主浄清、堅龍、広誉」、石灯籠には「本願主明智、良因、良泰、宝暦九(1759)巳歳二月十五日」と刻まれている。この地は長福寺の奥の院であったと伝えられる。

勅旨の大歳神社 もと字下川の宮田にあったが、元禄のころ今の地に移した。野里の山王神社より分霊を勧進し三王大明神と称していたが、維新後野里本社が日吉神社と改称したときに当社も大歳神社と改称した。

市川の渡し 渡し場は今の市川橋付近にあって、明治の初めまで渡船があった。「小川村明細帳」によると、藩から手当をもらった常渡し守が12人いたとある。明治8年(1875)に木橋が架けられ、同41年(1908)に一本松から東郷町へ通じる国道に鉄橋が架けられ、昭和16年現在の位置に架け替えられた。

旧市川橋東袖跡道標 小川の五霊天神社境内に、「右大阪・神戸、左丹波・有馬」と刻まれた標柱があるが、これは、明治36年陸軍特別大演習の際、旧国道と有馬道との分岐点に当たる市川橋東の袖跡に面して建てられたものである。

五霊天神社 一本松は以前、市之郷村御霊天神社の氏子であって、五霊天神社はもと姫路神屋の九所御霊神社の御旅所であったと伝えられる。明暦(1655~1658)のころ、一本松の鞍淵付近にあった集落が水没した後、天和3年(1683)、御旅所を拡張して御霊天神の分霊を勧請し、社殿を建立して祭祀したのが当社の起こりと伝える。現在は、菅原道真公を祭神として祀っている。

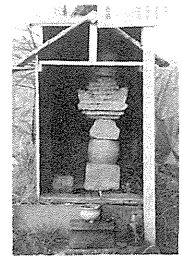
吉祥院在私の墓碑と地蔵尊 一本松の墓地にある。在私は亀井町の山伏寺院吉祥院に住していたが、明和2年(1765)、一本松に来て五霊天神社の社僧となって宮番をしながら、寺子屋を開いていたらしい。彼の死後、おそらく彼の妻と一緒に手習門人たちが寛政元年(1789)に墓碑を建てて葬ったものであろう。以前、五霊天神社拝殿の廂に掲げてあった「互霊山」の額は、在私の筆蹟であったが、今は不明である。

この墓碑のすぐ右にある地蔵尊は凝灰岩製で、室町時代後期のものと思われる。

■編集 出口 隆一 (姫路市文化財嘱託調査員)



▲若宮神社



▲ハツ塚



▲本覺寺行者堂



▲大酒地蔵尊



▲勅旨の大歳神社



▲旧市川橋東袖跡道標



▲市川の渡し付近

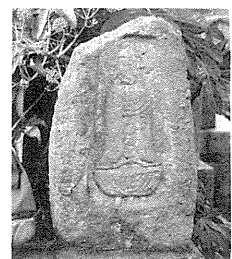
五霊天神社▶



◀五霊天神社祭の絵馬
左端に木橋らしきものが見られる。(明治13年か)



▲在私の墓



▲小川の地蔵尊